



## 目次

1. FD 合宿研修会報告
2. 公開授業報告
3. 他大学訪問調査・外部セミナー参加報告
4. FD ミニシンポジウムのお知らせ

## FD合宿研修会報告

FD 推進部／教育人間科学部 金馬 国晴

夏恒例の合宿研修は、今年度は、9月2日(木)～3日(金)、八王子市内の大学セミナーハウスで行われました。今年度の合宿では、従来以上に新しいことを試みました。

まず、昨年度に本学が大学全体として作成・発表した YNU initiative のような目標・評価の面、いわゆる学士力の検討という、授業方法にとどまらない議論をしました。教育学の視点から評価を論じる沖裕貴先生(立命館大学)をお招きし、各科目のねらい・成績評価から部局・大学の目標・評価に至る一貫性などについて論じていただき、それを各自の担当科目のシラバス書き換えで実感できるようなワークショップも行いました。

また、今回は、10月に発足する本学の「学生FDスタッフ」内定者5名と追手門学院大学の学生FDスタッフ4名ほか1名にも参加してもらい

ました。追手門学院大学の梅村修先生、古川隆司先生に学生参画型FDの意義を論じて頂いた後、学生FDの全国フォーラムで行われている「しゃべり場」をやってみようということで、追手門大学の学生たちに教員・職員も含めてファシリテートしてもらい、たっぷり経験をしました。彼ら学生たちが前日の夜の懇親会から参加して、教員や学生同士でじっくり交流した上でのことでした。

こうした企画は、本学のFDにとって大きな一歩を踏み出すきっかけとなるものと期待します。本学教員20名足らずでは惜しかった気もでしたが、今後、このニュースレターや、部局へ出張してのミニシンポジウムなどで、今回の合宿での成果を詳しくお知らせしますので、YNU initiative の改訂や学生FDスタッフの活動などに活かしていただければ幸いです。

## ワークショップ：YNU Initiative を読む =合宿研修初日前半

FD 推進部／工学部 森下 信

### 1. はじめに

FD 合宿研修のプログラム I の最初のワークショップとして、今年度に編集された「YNU Initiative を読む」なる作業が始まった。FD 研修合宿はただの参加ではなく、作業が伴うことをこのとき初めて知った。この小冊子は教職員に配付されたが、どのように扱ってよいかわからず、多くの教員は手元においてあるか、本棚に直行したか、(ゴミに紛れたか)という選択肢のひとつをとられているものと拝察する。さて、中身を改めてまじめに読んでみたものの、なぜこのような表現になったのか理解できない部分が多い。立命館大学の沖裕貴先生の講演内容を一部参照しながら、この小冊子の問題点を洗い出してみたい。

### 2. 誰が読むために作ったか？

この冊子を何度読んでも、誰のために作ったのか判然としない。高校生相手だけならばもっと平易な表現が必要であろう。在学生も同時に相手にしているようでもある。どちらかに比重を置くとよいが、どちらともとれない「もどかしさ」が随所にみられる。全体的には Policy なるものが 4 つ並んでいるが、掲げられた方針と、そこに書かれた内容の整合性もとれていない。前書きに「方針」と記し、中身では「Policy」と英語に変容した書き方は高校生に果たして受け入れられるだろうか。

### 3. DP・CP・AP との関係は？

大学内部の質保証を「外」に対して示すために、今後は Diploma Policy (DP)、Curriculum Policy (CP)、Admission Policy (AP)の明確化が必要とされ、さらにその明確化を推し進めるために、記述には体

系性・整合性・適切性・妥当性・有効性が求められるというのが今回の研修での主役のひとり、立命館大学の沖裕貴先生のお話である。形式上はこれらが YNU Initiative の各ポリシーに対応しているとみるべきであるが、記載されたポリシーと中身が対応しているとは言い難い。体系的も整合性もみられない。

### 4. さらに明確化を求めて

Policy1 では学位関連の方針として 4 つの実践的「知」を掲げているが、中身は「知」になっていない。「知」とは何か、明確にするべきである。

Policy2 では教育課程の方針が掲げられているが、教育課程は独創的というよりむしろ個人的であるべきではないか。書かれている中身は掲げた方針との整合性がみられず、先進的研究成果が多様な価値観にどのように結びつくのか、またどうして高い倫理観が得られるのか、理解に苦しむところではある。講義の基本は基礎的知識のたたき込みではないか。

Policy3 ではアドミッションポリシーを掲げていることは理解できるが、図の三角形がどうしてこの部分に挿入されるのか、吹き出しは何の意味があるのか、単純には理解できない。

Policy4 が FD であるが、突然 SD なる用語が登場し、なぜこの場所に記載が必要か理解できない。評価は多面的にするべきで、それにより PDCA サイクルが回るものである。

全体的には理念・目標があって、それを教育目標に落とし込み、さらに教育課程、授業設計へと体系化することが必要であろう。改訂版ではこれらに対する記述がさらに明確になるように修正を期待したい。

## 評価って？－シラバスづくりから大学評価まで ＝合宿研修初日後半

FD 推進部／留学生センター 小川 誉子美

プログラムⅡ・Ⅲは、立命館大学教育開発推進機構の沖裕貴先生による、講演とワークショップが行われました。

### プログラムⅡ 講演「目標に準拠した評価とは？－成績評価から大学評価まで－」

おもなトピックは、プログラムⅠと関連した「学士力」（中教審答申 2008. 12）と「国際的標準規格においたカリキュラムや学習成果と大学評価」についてでした。学士力に関しては、学生と教員の項目イメージの相違や大学版 PISA についても紹介がありました。「評価」に関しては、大学設置基準の改正【2008. 4】以来、各大学の改革成果の具体的な提示が求められるようになったことを受け、その対応策について詳細な説明がありました。各大学のかかげる目標や教育成果を改訂基準に照らし評価するには、ディプロマ・ポリシー（DP）、カリキュラム・ポリシー（CP）、アドミッション・ポリシー（AP）の3つを明確化し、これを PDCA サイクルで実現していくというものです。DP と CP を明確にするための方策、必要な作業や策定の留意点、さらに、カリキュラム・マップ（DP と各授業の到達目標との対応表）やカリキュラム・

ツリーについて、内外の大学の例とともに提示されました。こうした具体例を通じ、今後の作業について明確なイメージを持つことができ、参加者の理解が深まりました。



ワークショップで議論する参加者

### プログラムⅢ ワークショップ「観点別到達目標をふまえたシラバスづくり」

「観点別到達目標を備えたシラバスの策定と公開」は、DP と CP を明確にする作業過程の一つとして重要です。シラバス作りで重要なポイントは、「学生を主語に 15 週の授業終了後に最低限到達すべき知識や技能、態度を「～できる」という行為動詞を用いて記述する」、「到達目標」は学習者が合格する基準【=60点 可】を示し、「一般目標」は、到達目標に書ききれない上位の目標（=優・秀）を示すという点です。具体的な行為動詞の例も示されました。ワークショップでは、**課題1**として「到達目標」の事例（1. 英会話をマスターさせる 2. 自転車に乗るコツをつかませる）を書き直し、**課題2**として、参加者の今年度の担当講義のシラバスを各自書き直し、グループ・全体討論をしました。



講演中の沖先生

## 「達成目標」の改良例

ワークショップは、4 班に分かれて行いました。以下、課題毎に発表内容の一部をご紹介します。ご参考にして下さい。

### 課題 1：以下の到達目標の問題点を指摘し、改良案を示しなさい。

#### ○「自転車に乗るコツをつかませる。」

第 1 班改良案：自転車に乗って幅 1m の八の字道路を転ばずに走ることができる。

第 4 班改良案：自転車に乗るための手順が説明できる。

#### ○「英会話をマスターさせる」

第 2 班改良案：授業で用いた場面において英語で会話ができる。

第 3 班改良案：自分の得意分野をテーマとしたスピーチができる。それと共に、聴衆からの意見を聞き取り正確に答えられる。

### 課題 2：各自のシラバスの到達目標を見直し問題点があれば直し、どの観点を直したか示しなさい。

#### ○「航空機力学」の例

改良前：運動方程式の解を数値計算で求め、その結果から航空機の運動特性を調べる。

改良後：数値計算で求めた運動方程式の数値解から航空機の運動特性を説明することができる。

コメント：レポートで成績評価をするので「説明す



改良例を紹介する参加者

ることができる」に変更した。今までの前半は評価の対象にしていなかったため、目標から外した表現に変更した。

#### ○「セル構造体の力学」の例

改良前：セル構造体の特徴を理解することができる。また、学んだ解析手法を用いて、基本的な設計指針に対する選定・評価が可能となる。

改良後：①セル構造体、特にハニカム材やフォーム材の種類・特徴を説明することができる。

②学んだ解析手法を用いて強度評価ができるようになる。③与えられた設計条件に基づき、セル構造体の材質・幾何形状の選定が可能となる。

コメント：箇条書きにして具体性を持たせるなど、学生が到達目標をより理解し易くなるよう留意して改訂しました。難しい点としては、60 点（可）のラインをどのように設定するかが挙げられます。

#### ○「文化人類学の考え方」の例

改良前：当たり前が当たり前でないことを学ぶ。

改良後：文化相対主義の特徴とその批判を、国内・国外のそれぞれから具体例を引き、説明することができる。

コメント：シラバス作成に学生主体で達成目標を書くことについては以前から本学でも指示されていた。それが今回、講師の先生からその背景となる FD の考えを詳しく説明していただいたことで、今後納得して取り組むことができるようになった。また「可」を与える基準を目標に明記するなど具体性があり、理解できた。しかし反面、テストなどで成績評価を



シラバス改良作業中の合宿参加者

行う場合には、授業の核となる目標とは別に、授業の理解度や取り組み姿勢を確認するような目標の設定も必要に思われ、それらを同列に記述することに違和感を感じた。その点については、自分が従来用いてきた成績評価の方法そのものを再考する必要があるかもしれない。

○「日本語教育学概論」の例

**改良前：**日本語を第二言語として非母語話者に教える際、必要な言語知識について整理し、説明できるようになる。日本語教育の需要がどのように創出されてきたのか史実を知り、自分なりの意見が持てるようになる。

**改良後：**日本語を第二言語として非母語話者に教える際、初級レベルに必要な構文（テンス・アスペクト・ヴォイス）について整理し、説明できるようになる。日本語教育の需要がどのように創出されてきたのか、16世紀以降の史実を知り、レポート発表を通じ、自分なりの意見が持てるようになる。

**コメント：**範囲を具体的に示すことで、評価の範囲や内容もわかる表現に変更した。

沖先生は、劇的ビフォーアフターを期待されていたようですが、(元がかなり良くできていたので)今回は特になかったとのこと。沖先生、ありがとうございました！

学生参画型FDのケースと国大での可能性 =合宿研修2日目

FD推進部／環境情報研究院 上野 誠也

学生FDスタッフ芽生えの時代

合宿2日目のテーマは学生を含めたFD活動である。今、全国の大学のFD活動に学生を委員として含める流れが急速に立ち上がっている。学生によるFD活動の草分け的存在として、岡山大学や立命館大学の活動があることは、既にこのFDニューズレターで紹介して御存知の方も多いと思う。そもそもFD活動は教育改善が

大きな柱として存在している。その教育の受益者が学生であることは疑う余地もない。それならば、改善が進んでいるかどうかの判断も学生が行うのが当然である。アンケートという手段で学生をFD活動に取り入れている大学は多いが、学生の生の声に耳を傾けて、より効果的なFD活動への発展をねらう流れが全国で起こっている。本学でも、今年度から学生FDスタッフを組織し、学生を含めたFD活動を始めた。その活動のために、先駆者である大学から講師ならびに学生達を招いて、学生を含むFD活動の効果を紹介するとともに、問題点とその対策を聞く場を設けた。

<b>合宿2日目プログラム</b>	
9:00—	プログラムIV 講演 「学生とともに進めるFD」 追手門学院大学教育研究所 梅村修教授 「大学教育は学生が加わることで成り立つ」 追手門学院大学教育研究所 古川隆司准教授 「追手門の活動報告」 追手門学院大学学生FDスタッフ
11:00—	プログラムV ワークショップ 「学生しゃべり場」
14:00—	プログラムVI ワークショップ 「しゃべり場のふりかえり」

講演「学生とともに進めるFD —追手門版 学生スタッフ 現状と課題—」  
追手門学院大学 梅村修教授

追手門学院大学は大阪府にある学生数が6000人程度の文系私立大学である。FD活動に関しては、教育研究所の下に活発に活動を行っており、学生FDスタッフも教育研究所の予算



梅村先生の講演

の下に活動している。学生 FD スタッフは昨年度の公募で立ち上げており、12名で構成されている。設立から1年を経過したところで、本学にとっては最も重要な設立時の問題点とその対策を紹介してもらう目的で、追手門学院大学から学生スタッフを含めて梅村先生に来ていただいた。

学生 FD スタッフの活動内容は週2回の会議を基本としており、意見交換の場を持つことを重視している。本学ならば中央図書館の1階のように学内を歩く他の学生から見るができるガラス張りの部屋で会議を行っている。この1年間の活動は、授業評価アンケートを学生の手で改訂したり、評価の良くない教員へインタビューを行ったりなどの学内活動や、学外の学生 FD 活動フォーラムに参加して活動内容を発表するなど活発である。

梅村先生の講演内容は、学生 FD スタッフの設立と軌道に乗るまでが中心であった。立ち上げるのは簡単である。それで安心したのでは活動はできないという経験談から始まった。組織は存在するが、いくつかの課題のぶち当たり、それを解決することが教員に要求されている。教員は何ができるかという問いには『はしわたし』が重要であることを強調された。学生側に起こる課題は、以下の3点にまとめられた。

1. 学生間のイメージに差がある・・集まった学生たちの FD 活動に対する考え方に差があり、授業への不満という共通なスタート点でありながら、統一した方向へ目標が定まらないという問題点である。
2. 議論ばかりで実行が無い・・授業改善への意見は数多く出るのであるが、実際の行動となると実現可能な具体案が絞れないという問題点である。
3. 活動へ孤立感を感じる・・授業改善を目指す FD 活動を進めれば進めるほど、一般の学生と離れていく傾向があり、学生間でも FD 活動の拡大が難しいという問題点である。

これらの課題は学生も感じており、挫折を繰り返して進んできたと言っていた。一方、教員側にも課題が起こっている。

1. 教員の教育観とずれがある・・なぜ学生が教育に口を出すのかという発言にみられるような FD の目標を理解しない教員との対立が課題としてあがっている。
2. 無関心な態度が見られる・・学生 FD 活動は良いことだと発言する賛成論者でも、実際の行動は全くとらない教員が多く見られる。
3. 監督責任と自由奔放のバランスが難しい・・学生の意見を出すには自由奔放が適しているが、それだけに徹してしまえば単なる学生サークルになってしまう。

これらの課題は本学にも当てはまることは大いに考えられる。それをどのように切り抜けてきたかは重要な内容である。

梅村先生の講演の締めくくりは、3点の結論を主張された。

1. 無理強いしてはならない・・学生の生の声を出すには、学生のペースで進めなければならない。教員のペースとは異なることを認識することが必要である。
2. 楽しくなければならぬ・・学生が持続する活動を続けるためには、学生が楽しくなけ

ればならない。

3. 教員の意識改革が必要である・・・これは特別ことをやっているのではなく、「学生参加が当たり前」という気運を生み出さなければならぬ。

まだ本学は学生 FD 活動がどのように動くかは全くの未知の世界である。梅村先生の講演を参考にし、立ち向かう壁に対処しなければならない。そのためには、FD 推進部のみならず全学の教員のサポートも必要となるだろう。

**講演「大学教育は学生が加わることで成り立つ —学生が参加したいいくつかの例をもとに—」**

**追手門学院大学 古川隆司准教授**

講師の古川先生は職員としての就職指導の経験も持ち、教員と職員の両方の立場から学生と接した事例を基に FD 活動に欠けている点を指摘された。冒頭のエピソードはどの大学でもやっているのではないかと感じた。学生会館を作ると大学が計画を練っているのに、使用者の学生の意見を聞こうとしない事例である。教職員が学生に対して「よい」と考えていることが本当に学生も「よい」と感じているのだろうか。意識の差があるのではないかという指摘である。授業においても、学生の手で授業を組み立てることが必要であり、教員の興味本位で授業を組



古川講師の講演



追手門学院大学学生 FD スタッフ 4 名による寸劇風にまとめた活動報告

み立てていないか。職員の経験からは、学生のためを思って就職を指導したのに、当の学生はその行動をとらない事例が紹介された。学生が見えていない。教職員が勝手に学生像を作り上げて、その架空の学生に対して授業も就職指導も行っている。この事実気が付いていない教職員が多いと指摘された。講演の最後に、学生が主体で動くとうちが変わると結論し、学生 FD による大学改革への期待が述べられた。

**「追手門の活動報告」**

**追手門学院大学学生 FD スタッフ**

教員側の講演に続いて、追手門学院大学の学生 FD スタッフによる活動の紹介があった。学生らしく、BGM 付きの映像で 1 年を振り返り、寸劇風に話を展開した。講演の手法も学生による新しさを感じた。印象に残った言葉は『挫折』である。学生間で意見の対立があり、個人の意見が思うように実現できない。苦悩の日々が紹介された。梅村先生の講演にもあるように、組織を立ち上げることは簡単である。しかし、それが活動するには組織作りより大きな課題がある。追手門学院大学の学生達も、設立から 1 年経った今が我々のスタート地点であると宣言した。本学がこれから体験する試練を感じた。



学生と教員の混成グループでの議論

### ワークショップ「学生しゃべり場」

講演の後のプログラムは、学生FDの定番である「しゃべり場」である。しゃべり場とは、複数のグループに分かれて、決められたテーマについて自由に意見を述べあう場所である。グループの中で役割分担をし、進行担当や記録担当がいる。終わったあとには、各グループからの意見を交換し、情報を共有することが目的である。重要なルールが一つあり、それは他人の意見を否定しないことである。今回は教員のFD研修であるから、学生と教員が混ざったグループを構成した。昼食中も話を続けながらグループ単位でとった。

「良い授業とは何か?」、「大学生活は充実しているか?」など各グループで異なるテーマを話し合った。答えを出すのではなく、意見を交



4グループに分かれて各テーマを議論

換することに意義がある。学生と教員が同じ立場で話し合う企画となった。ここでも学生と教員の意識の差が現れた。一つ例を紹介しよう。必修科目とは何かという問い掛けへの答えである。教員は卒業のために必要な科目、あるいは、次へ進むために必要な科目とゴールの必要条件と考えていた。ところが、学生は次へ進む学習意欲をもたらす科目を必修にして欲しいと考えている。勉強のためのドライビングフォースを必修にすれば、学生は自然と勉強に興味を持つというのである。教員はゴールから引く力を考えていたのに対して、学生はスタートから押す力を欲しがっていたのである。逆の考え方である。同じ立場で話し合わなければ、出てこない意見である。



自由な雰囲気での発言が重要

### ワークショップ「しゃべり場のふりかえり」

合宿の最後を締めくくるワークショップは、教員が初めて体験したしゃべり場をテーマとした。学生と教員が混ざったしゃべり場の良い点と悪い点を書き出し、それをグループ内でお互いに紹介することで、テーマの方向性を見つける展開で進めた。学生と教員が混在したグループでのワークショップである。

良い点の一番は、学生と教員の距離が縮まる





グループ内の意見を紹介して知識共有

ことである。話し合いを続けることで、お互いを知ることができ、細かなことが伝えられる点である。授業評価アンケートでは表面的にしか相手を見ることができないが、しゃべり場では相手を深く知ることができる。学生と教員のギャップを詰めることがしゃべり場では可能である。さらに一歩進んで、授業に熱意が見られな

い教員としゃべり場を持ちたいという学生側からの提案が出た。授業改善に学生の方が熱心である。ところで、縮まったのは学生と教員の距離だけだったのだろうか。実は、教員と教員の距離も縮まっていた。他の教員が持つ授業観を知ることができ、授業に関する視野が広がった気がする。

当然のことながら欠点も指摘された。議論だけに終わってしまい、具体的な授業改善につながらないのではと心配の声が上がった。確かに、しゃべり場で終わってしまったのでは、この指摘は正しい。でも、決してしゃべり場で全てが終了するとは考えてはいない。しゃべり場はスタート地点であって、決してゴールでは無い。具体的な活動へ向けて、FD 推進部は行動をとらなければならない。限られた数の学生と教員によるしゃべり場の内容を、他の教員へ伝えることが重要である。これも橋渡しの一種である。



学生スタッフも交えて合宿参加者の集合写真

## 公開授業報告 周佐喜和教授「技術マネジメント論」

環境情報学府 上野 誠也

後期にしか開催されていなかった公開授業を、今年度は前期にも開催することにした。年度の初めから企画を実施し、ポスター等でアナウンスを行った。その一番目の授業が6月16日に開催された環境情報学府の周佐教授による「技術マネジメント論」である。

受講学生に講義内容を理解させるのに難しい科目である。技術マネジメントは経営学の科目である。周佐先生の言葉を借りれば、「経営学なんて、一度社会に出た人が経験を背景に学ぶものであって、企業経験の無い学生にはイメージがつかみにくい学問なんだよね。」である。特に、今回の内容は企業における技術者の役割など、経営側の立場の内容である。さらに追い打ちをかけるように、受講学生が環境情報学府の大学院生である。ほとんどが理系の学生に対して、経営学という文系の科目を講義するのである。そして、「技術マネジメント論」は環境情報学府の前期課程の学生ならば全員が受講しなければならない科目である。受講内容が専門でない学生200人を前にしての講義である。

授業内容は、ところどころに分かりやすさに努めていることが感じられる。まず、使用しているスライドが見やすい。各スライドは題目と8行以下の箇条書きか短文である。大教室の後ろからも読める文



配布資料と同じスライドを使用

字の大きさであり、文は後で読み返しても内容が思い出せるのでありがたい。その見やすいスライドを配布資料にしているから、授業の流れが理解しやすい。さらに、学生にとってイメージがつかみにくい内容を、ニュース等で話題になった例を挙げて解説している。教員が話し続けるスタイルの講義であるが、詰め込みの感じは全くなく、時々復習しながら進めている。話した内容を100%覚えろというのではなく、概念を頭の片隅に残しておくだけでよいという教員の気持ちが伝わってくる。

講義全体を通して、これを理解しろよというような圧迫感が無かった。講義の内容を学生がすぐに使う場がないことから、詳細を覚えても意味が無いという雰囲気である。周佐先生からも、「おそらく10年後でないと役に立つことがないことだから、その時に、ふと記憶によみがえってくればいいんだよ。」という説明だった。企業における技術者の課題の説明に対して痛いところを突かれたと感じたのは、200人いる教室の中で、企業経験のある私一人であったかもしれない。様々なタイプの受講生がいることを理解した上で、講義を組み立てている。学生本位の講義であった。



講義中の周佐教授

## 公開授業報告 「比較社会文化論Ⅰ」／「原価会計論」

経営学部 松井 美樹

平成 22 年度前期の経営学部の公開授業は、直近のベストティーチャー賞を受賞した 2 名の准教授の協力を得て、実施された。その概要は以下の通りであった。

### 1. 比較社会文化論Ⅰ

担当教員：ソーントン武アーサー准教授

日時：7月8日（木）5限

教室：経営106教室

テーマ：メディアのグローバル化とハリウッド映画

参加教員：5名

スライドの工夫と身振り手振りを含む話術が特徴的な授業であった。画像を多数使ったパワーポイントの資料が丁寧に見やすく作成され、効果的に使用されていた。学生にランダムに質問を投げかけ、問いかける感じの巧みな話術に、身振り手振りを交えて注意を集めるように配慮されていた。分かりやすい身近な例を使いながら説明がスムーズに展開され、途中にヤマ場もあり、100人を超える一斉授業が成り立つだけの語り口であった。

更なる改善の可能性として、英和両方のスライドが用意されているが、アニメーション機能を使ってタイミングをずらした方がより効果的である、各スライドの最後の項目を出すタイミングをより早くした方がよい、時間外学修の動機づけをどう与えるのか、学生の出席率をどう上げていくのか、授業途中での学生の出入りが気になったといった指摘があった。



### 2. 原価会計論

担当教員：高橋賢准教授

日時：7月9日（金）2限

教室：経営208教室

テーマ：総合原価計算

参加教員：3名

この授業はパワーポイント等のスライドを使わず、伝統的な教科書と板書に基づく講義であったが、学生の集中力が途切れることがないように工夫が施されていた点に特徴がある。授業中に教科書が有効に活用されており、講義を念頭に置いた内容と量の教科書が用意されていた。板書は後で読み返しても理解できるように、省略されることなく丁寧に書かれていた。重要な論点や結論については黄色や赤のチョークを使って強調されていた。板書のそのスピード、量とも適切で、学生が考える時間が取られていた。パワーポイント等を使った授業でも、学生にしばらく考える時間を与えるようなスライドを用意することが有効ではないかという示唆を与えるものであった。また、学生が計算例題に取り組む時間が取られており、授業の内容が身に付くように時間配分がされていた。

公開授業後の意見交換では、更なる改善の可能性として、教室の大きさを考慮すると板書の文字サイズがやや小さく、後ろの方の席からは判読がやや難しいのではないかと、より多くの時間を学生の計算に割り、指名して答えてもらうようなやりとりがあってもよいのではないか、というような示唆があった。



## 大学訪問調査報告（教養改革編 北海道大学・岩手大学）

### 北海道大学（対象者：高等教育機能開発総合

センター 細川敏幸教授、および安藤厚教授）

訪問日時：平成 22 年 3 月 16 日（火）

訪問者：金馬、工学部技術職員 長谷川紀幸

北大では、札幌農学校時代の「全人教育」という伝統を受け継ぎつつ、全学共通の教養科目をコアカリキュラムと名付け、カリキュラム全体の中心に据えてきた（2001 年～）。外国語、情報科目などを含みつつ、専門教育の基礎となる基礎科目とは区別して、純粋な教養科目と位置づけられている。「最良の専門家による最良の非専門教育」をモットーに、全学の広い協力によって運営されているという。

国大の課題との関連で、とくに興味をひくのは、一般教育演習という初年次ゼミであろう。フレッシュマンセミナーと呼ばれ、論文指導のクラスも含む（20 名程度～30 名程度）。主題は学生が選択でき、以下のようにとても多彩である。受講生を文系・理系などと区分もしない（なお、主題別科目のいくつかにも論文指導が含まれている）。

北大エコキャンパスの自然と歴史、学問的読み方の訓練、社会科学入門、政治学の名著をよむ、古墳を造る～版築の復元～、札幌の地域ツアーづくりで大学の「学び方」を学ぶ、中国を知る 12 章、「男」か「女」かということ～これからの生き方・働き方、健康食品ウソ？ホント？、食べ物食卓に届くまで、メディア作品に描かれる旅の諸相について、最先端のイメージングテクノロジーで生命を観る、暮らしの中の放射線、身近にあふれる健康を科学する、物づくり実習～アンプを作ろう、聞く力・話す力のトレーニング、日本語文章能力検定準備講座・・・

ガイドライン（2002 年）が作られて、申し合わせもされている。

この全学の教養科目と密着しながら、FD が努力義務化される以前から、新任教員研修（1995 年～）、

### 教育人間科学部 金馬 国晴

全学 FD 合宿と TA 研修（1998 年～）を行ってきたという。

学生に対しても毎年、コアカリキュラム・パンフレットを全新生に配布している（2001 年～）。そこにはわかりやすく、教養科目という「コアカリキュラムは北海道大学という『世界』の歩き方を示す案内板」のようなもの、「それを参考に、自分の意志と力で歩くことによって、専門分野という多彩なモザイクで構成されている『現代世界』に無理なく自然に参加し、それを自分で経験することができます」などと表現されている。

授業評価アンケートに関しては、全国に先駆けて 1993 年に試行して、1999 年から毎年実施してきたという。合宿研修にしても、内容豊富なレクチャーに、シラバスづくりを組み合わせたワークショップ形式で、毎年行ってきたという。「北大では、FD でやっているのだから、全員が大人数講義でもグループ学習を指導できる」と断言されたのには驚嘆した。何についても先駆的との印象をいただいた。なお、FD 研修会でのテキストという大部なファイル、『全学教育科目実施の手引(教職員用)』他たくさんの内的資料、および『高等教育ジャーナル～高等教育と生涯学習～』などを頂戴した。

### 岩手大学（対象者：玉真之介理事・副学長）

訪問日時：平成 22 年 3 月 9 日（火）

訪問者：金馬国晴

「持続可能な社会のための教養教育の再構築：『学びの銀河』プロジェクト」と打ち出して、教養科目の視点として、国際連合が提起し 2005 年から世界で取り組まれてきた ESD（持続可能な開発のための教育）を織り込んで、全学の教養教育を「21 世紀型市民」育成の教育プログラムとして再構築されてきたお話を伺った。

もともとこのプロジェクトは、平成 12 年度から

始めた教養改革が暗礁に乗り上げた際、何か統一的理念を、と発想されたという。岩大には、環境教育に関心のある教員が学部を越えて多いことから、その一人の玉先生が、当時から理事・副学長を務め、大学教育総合センター長も兼務していたことから提起をし、自ら取組責任者となって、現代GP（文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」）を申請し、平成18年度から進めてきたという。教養教育改革としては全国的に早い取組といえ、かつ内容としても体系的である。

とりわけ横浜国大の課題と関わって、興味深いうかがったものを挙げてみたい。

○初年次の転換教育(初期ゼミ等)を含む全学共通教育に、ESDを盛り込むとの指針を掲げ、多くの教員の共同作業として、漸進的に教養教育の再構築を図ってきたこと。

その際、ESDのコアである「尊重の価値観」につき、岩手県の自然や風土、そして岩大とも関係の深い宮沢賢治の思想を重ね合わせて、それが「思いやる心」と表現されて、各教育科目が岩大の教育目標にある「高い倫理性」を意識するよう努められている。

○ESDの総合性を環境、社会、経済、文化といった領域(「4つの領域」)で示すことに加え、その実践的性格を「関心の喚起」、「理解の広がり」と深化、「学生参加型」、「問題解決の体験」との新しい指標(「4つのタイプ」)で示して、学生が専門分野の枠を越えて科目相互のつながりや現実とのつながりを理解できるよう、カリキュラムの構造化と可視化を図っていること。

その際、各領域が「思いやる心」を中心に重なり合う様子を銀河系にたとえ、各領域に位置する各科目を星にたとえて、学生に、領域とタイプの異なる星を線でつないで自らESDの星座を作るイメージを提示して、「学びの銀河」と呼んでいる。

○「高年次課題科目」(3年次、4年次)として、学外の行政、NPO、さらに小中学校と協働し、環境問題をはじめとする地域の具体的な問題について、フィールドワークを含む科目を新設した。

地域防災、環境再生、流域連携、教育エコキャンパスなど、岩手県や岩大独自のテーマを選び、地域における実践活動と相互交流を図るとともに、地域の小中高校とも積極的に連携している。(例えば、男女共同参画の実践を学ぶ、都市の自然再生プランニング、北上川流域学実習、健康のセルフコントロールと社会参加)  
○専門家を招き、教員向けの「ESD銀河セミナー」などを開いてきている。

分野は教育、政治、法学、文学、子育て、環境問題、招かれた講師は、通信社、中小・大企業、役所、NPO、お寺の方など実に多彩である。

国際シンポジウムも主催している(2007年「持続可能な未来のための教育～アジアにおける大学の役割と連携～」)

とくに横浜国大からみて示唆的なのが、基礎ゼミナールと思われる。共通で使う冊子として、大学教育総合センターが『大学における「学び」のはじめ』を編集し、全ての新生に配布するなどしてきたという。その章立ては、

第1部 岩手大学の教育、第2部 アカデミック・スキルの基礎、第3部 自学自習とソーシャル・スキル

となっており、DVD『環境保全型の岩手大学をめざして～あなたに心がけてもらいたいこと～』も付いている。教員に1年次が大事だとの意識が共有されてきて、「自分たちは基礎ゼミナールがなくて不幸だった。一学年下の学生はうらやましい」と言う学生も現われたという。玉理事の「この3年間で一番、この大学の成果を確認できるのが基礎ゼミナールかもしれませんね」という言葉に、横浜国大の理想を重ねてみたい気がした。

さらに、県内の幼小中高専門学校との間でも、サミットを例年開き、ESD円卓会議というものも始めた(2008年)という。

統一的な、だが多彩に展開できる理念によって、方々につながり広がっていく可能性を感じた。

〔参考文献〕 『ESD銀河レポート』No.1(2007年)～

『岩手大学「持続可能な社会のための教養教育の再構築」『学びの銀河』プロジェクト最終報告書(平成18年10月～平成21年3月)』ほか

## FD 研究会「大学の教育情報公開はいかにあるべきか」参加報告

FD 推進部門長 上野誠也

### FD 研究会

大学セミナーハウスが企画する第4回FD研究会が、全国の大学から約80名の教員・職員が参加して、6月26日に工学院大学で開催された。情報公開と題目にあるが、直前に行われた学校教育法の改正が主なテーマとなった。FDの立場から研究会の内容を報告する。

### 教育情報公表の義務化

教育情報を公表することが義務付けられた。6月15日に公布された改正・学校教育法に教育情報を公表することが織り込まれ、来年4月から施行されることになった。今年の大学セミナーハウス主催のFD研究会は、この話題を取り上げて、基調講演に文部科学省高等教育局から講師を招いて行われた。改正に至った背景から、改正の目的、大学への期待までを聞くことで、改正の意図するところを理解することから始まった。

公表へ至る道程は、平成20年の文部科学大臣から中央教育審議会への諮問「中長期的な大学教育の在り方について」から始まる。社会や学生からの多様なニーズに対応する大学制度と教育、グローバル化の進展の中での大学教育のあり方、人口減少期における大学の全体像が問われた。それに対して中央教育審議会は平成21年6月に大学の質保証システムの一環として、教育情報の公表の促進を掲げた報告を行った。その中では、公表する教育情報を以下の三項目の観点から整理することが示されている。

#### ①公的機関としての説明責任の観点

大学は、公的な教育機関として、その活動や取組について、社会への説明責任を果たすことが求められる。例えば、教育課程、教員の専門、学生数、学習環境などである。これらの情報の

公表は法令により義務化とし、公表の基準を満たしているかどうかを認証評価で確認することとなった。

#### ②教育力の向上の観点

大学は教育情報の公表を通じて、教育力の向上を図ることが重要である。たとえば、学生がどのようなカリキュラムを通じて、どのような知識・能力を身に付けることができるかなど、大学の特色ある教育活動を積極的に発信することが、教育力の向上につながる。これらの情報の公表は努力義務化とされたが、競争的資金等の申請要件にするなどとして、公表を推進することとなった。

#### ③国際競争力の向上の観点

国際化を目指す大学には、教育への取組を国際的に示すことで、国際競争力の向上を図ることが必要である。大学の教育情報の中に留学生への対応などを国際的に公表することである。全ての大学に要求することは無理であるので、指針として扱われることとなった。

これらの教育情報は誰に向けての公表であるか。大学の社会責任を問われているからには、一般社会への公表であることは明らかである。しかし、それ以上にこれから大学へ入ろうとする高校生やその保護者への公表でもあることが必要である。単にデータの羅列ではなく、分かりやすい公表方法が問われている。

### 教育情報公表とFD

教育情報がFDとどのように関わっているかを確認したい。当然のことながら、前項の②に示された教育力の向上へ結びついている。公表することで、公表に耐えられる内容を整備し、実施する義務が課せられることになる。明らかに教育の質

保証を実現するための有効な手段である。

授業映像を web 上に公開している例がある。オープン・コース・ソフトウェアなどと呼ばれているもので、慶応大学や MIT など有名な公開事例がある。講義の録画などを誰もが見られる形式で公開している。質問は受けないという前提であるから、公開後の教員の負担は全く無い。一方的な授業公開であるが、この取組も授業内容の向上に繋がると高く評価されている。

教育情報の公表には、授業内容の改善以上の効果が期待できる。教育情報の公開事例として、芝浦工業大学の事例が紹介された。当大学は都内の私立大学であり、いろいろな大学ランキングで本学と大差ない位置によく現れている。その大学が、危機感を持って大学改革を実行し、教育情報の公表を行っている。事例報告の講演の中で、情報公表は教員の意識改革に繋がると報告があった。

- ・情報公開は大学改革のチャンスと捉え、自分自身を見直すよい機会である。
- ・情報公開してははずかしくない体制の構築と内容の充実へ繋がる。
- ・情報公開はさせられるものではなく自ら進んで行うものとする。

義務化といわれるとネガティブな反応をしがちであるが、このようにポジティブに活用している大学がある。

義務化された情報のほとんどは、本学では既に公表されている内容である。本学に重要なのは努力義務化に位置付けられた②の観点の情報である。一部の情報は既に公開されているので、より分かりやすい公表方法へ展開する時にこの教育情報の公表をポジティブに活用してもらいたい。

## 教育情報公表の問題点

質疑応答ならびにグループディスカッション

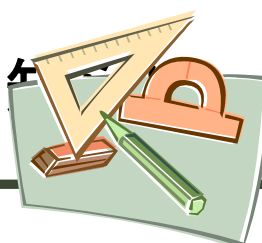
形式で行われた分科会で教育情報の公表に関する疑問点や問題点が指摘された。一番多く声が挙がったのは、担当者不足の問題点である。情報公表の作業を誰が手を動かすかという問題である。今までの業務に追加された作業であるから、業務担当をやりくりしなければ作業は進まない。特に小規模大学は切実な問題である。大規模大学が中心に置かれて考えられた制度改革のような印象がある。

一方、外部が欲しがっている情報も多様化しているので、それらに十分答えられるかという不安も示された。会場からの声では、発達障害者の子を持つ保護者が欲しがっている情報も必要と指摘があった。確かに、大学全体では1%に満たない学生が必要とする情報であるが、当事者にとっては100%必要な情報である。情報公表は全体に目が向けられることが多いが、細かい部分があることを忘れてはならない。

## まとめ

教育情報の公表に向けてのセミナーに参加して、公表の重要性を再認識することができた。目的も明確に示されて有効性もわかりやすい内容である。一方、当事者の文部科学省も実施のためには数々の課題はあると認識しているように課題は山積状態である。実務を担当するとなったら、法令のように簡単には実施できないことがあると思う。精神賛成行動反対の感がある。しかし、この教育情報の公表を教育力向上の好機と捉え、積極的に取り組むことが必要だと感じた。FD の立場からは教育情報公表から生み出る副産物、すなわち教育力の向上に大きく期待している。

# FD ミニシンポジウムのお知らせ



FD 推進部では、各部局の教授会前の 30 分程度の時間をいただき、他大学の FD 活動の事例紹介などを中心としたミニシンポジウムを計画しております。下記のテーマを用意しておりますので、ご希望を FD 委員へお伝え下さい。部局単位で開催いたします。日程等の準備が整いましたら、ご連絡致します。多くの先生方のご出席をお願い致します。

### テーマ案

**【テーマ A】 組織的教育力の向上**

他大学事例：教室会議後に 1 名が授業の工夫を 5 分程度で紹介する。

**【テーマ B】 教育情報公開による教育の質保証**

他大学事例：授業内容（動画）をホームページ上に公開している。

**【テーマ C】 学生参加型教育方法**

他大学事例：学生同士で講義内容（問題の解法）を説明させている。

**【テーマ D】 シラバスの書き方**

他大学事例：受講者が主語となるように到達目標を記述する。



ご意見・ご感想がありましたら、下記宛までお寄せください。

### YNU FDニュースレター No. 13

編集／横浜国立大学 大学教育総合センターFD推進部

作成担当：ニュースレター・ワーキンググループ

事務担当：教務課大学教育係

問合せ先：kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp

発行／平成22年10月